

加賀篠原合戦と平氏軍の大敗



(斎藤実盛の首を洗ったとされる) 首洗池から望む白山連峰 (石川県加賀市柴山町手塚山公園)

源平合戦で名高い寿永2年(1183)5月11日の加賀・越中国境における倶利伽羅合戦^{※1}で、源(木曾)義仲の奇襲にあつて敗北した平氏軍は、石川郡宮腰(現金沢市金石町)の佐良嶽の浜まで退却して陣をとり、これを追撃して同郡平岳野(現金沢駅周辺)の木立林に布陣した義仲軍と対峙した。

しかし平氏は、その後義仲勢の夜討を恐れて、石川郡藤塚・能美郡今湊(現白山市内)へと退去を重ね、5月26日には、梯川を越えて能美郡の安宅湊(現小松市安宅町)に着き、川に掛かる橋板を引き搔いて、義仲軍を迎撃する陣を布いた。

この間、途中当時手取川^{※2}本流となっていた小川大行事(現白山市小川町付近)では、夜陰の渡河で折からの洪水に遭い、平氏軍千余騎が、水に流され溺死したと『源平盛衰記』にみえている。

義仲軍の梯川渡河と篠原合戦

平氏軍を追って梯川に迫った義仲勢は、橋板が剥され渡橋不能の状態と川水が濁り川底がみえなかったため、渡河を躊躇する。『源平盛衰記』によれば、このとき義仲は、加賀国の住人林光明を召して、河の瀬踏みを命じた。そこで光明は、馬10疋に手綱を結び懸け、河に追い入れ渡河を試みたところ、水深の浅さが判明したため、義仲軍は、海野・望月・仁科・村山など信

濃勢を先頭に、一気に河を渡り安宅の平氏の陣に攻め入ったとある。このため平氏軍は、安宅の砦で暫し交戦したが、やがて敗北し江沼郡の成合(現加賀市篠原町付近)へと後退する。

勝ちに乗じた義仲軍は、さらに追撃を続け、再び成合の地で平氏軍との間で、激闘が展開された。『源平盛衰記』は、そのときの状況を、「両陣乱れ合いて白旗・赤旗相交り、天に翻る事夥し、馬の馳違う音、矢叫び声、雲も響き地も動くらんと覚えたり、蹴立ちのほこり空に充満て、朝霧の立つが如く也」と語っている。

この合戦でも大敗を喫した平氏軍は、同郡の篠原宿に退いたが、なおも義仲軍の攻勢に遭い、さらに近接の並松の地でも戦闘を続けた。そのためこれらの合戦において、大將軍の平知度(清盛の七男)をはじめ、平景高(清盛の三男宗盛の乳母の子)・平盛綱など30余騎の平氏方の諸将が討死した。また南加賀の安宅・成合・篠原・並松の合戦で討ち取られた、3760人の平氏方の首級が、竿を結び渡して懸けられたとされている。さらにかつて源氏方に属しながら、平氏の軍を前にして平氏方に寝返った、越前平泉寺長史の斎明も、このとき生捕られていた。

斎藤別当実盛の討死

『平家物語』の古写本である『延慶本平家物語』には、

※1 平維盛を総大将とする北陸道追討軍は、越前燧城(ひうちじょう)合戦で勝利し、撤退した源氏勢を追って加賀へ進撃したが(北陸歴史探訪第12回)、加賀・越中国境の倶利伽羅峠で大敗し(同第2回)、加賀へ撤退していた。

※2 「手取川」の名は、平氏軍を追う木曾義仲軍が篠原の戦いを前に、増水して濁流と化していた、現在の手取川の北を流れる当時の手取の本流(小川大行事)を渡るとき、多くの兵士が互いに手に手を取って流されないようにして渡ったという伝承に由来する。

この合戦で壮絶な討死を遂げた、平氏の家人齋藤別当実盛^{さいとうべつとう さねもり}のことが語られている。武蔵国の住人実盛は、元は越前国の武士であったが、所領の関係から武蔵国に移り住んでいた。たまたま上洛の折り、平氏の北陸道追討軍に加わることで、京都出立に際し、故郷に錦を飾るため平家の総帥であった平宗盛に願い出て、錦の直垂^{ひたれ}^{※3}の着用を許されて出陣した。

しかし敗退を重ねる平氏軍に在って、篠原の合戦で赤地錦の直垂に黒糸威^{くろいとどし}^{※4}の鎧を着けた実盛は、義仲軍の信濃国の住人手塚太郎光盛と奮戦し討死を遂げることになる。合戦後、光盛が大将義仲の許へその頸を持参し見参に入れた際、この武士は自らを名乗らず、木曾殿が御覧ずれば知りたる者と述べたことを伝えたところ、義仲はその頸が齋藤実盛ではないかと疑った。

そこで早速実盛とかつて同僚で顔見知りの樋口次郎兼光^{ひぐちのじろう かねみつ}を呼んで首実検させたところ、兼光は一目みるなり涙を流し、それが齋藤実盛であると証言した。さらに兼光は、かつて実盛が60歳を超えて出陣する際には、敵に侮られないため、白髪を恥じて髪を墨で黒く染め戦に赴く旨を語っていたことを話した。これを聞いた義仲は、その頸を水で洗わせたとこ白髪の姿が現れる。

実盛はかつて関東に在って源義朝^{よしたも}（頼朝の父）の郎従であった頃、義仲の父源義賢^{よしかた}（義朝の異母弟）が、甥の源義平^{よしひら}（義朝の長子）と争い殺害された折、幼い義仲を密かに信濃国木曾谷に逃した命の恩人であった。小松市の多太神社に所蔵される伝実盛着用の兜（国指定重要文化財）は、義仲が実盛の死を悼んで奉納したものと伝えられている。



齋藤実盛の首を抱いて涙する木曾義仲像（加賀市手塚山公園）

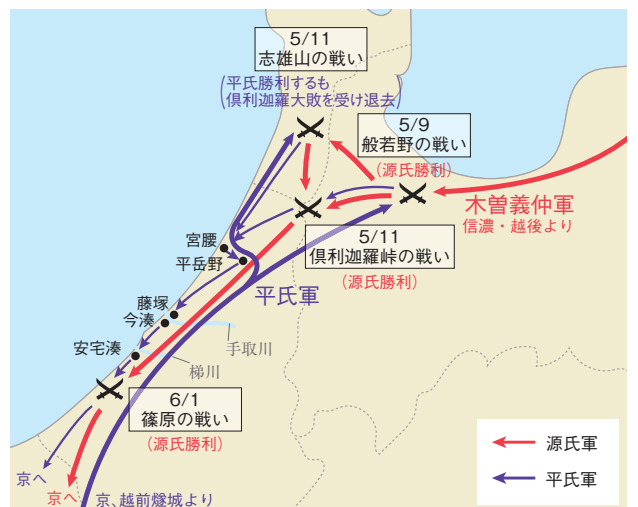
平氏軍敗績の悲報

篠原周辺合戦の詳細は『平家物語』諸本の語るところであるが、寿永2年6月朔日のこの合戦で、平氏軍大敗の報が、同月4日に飛脚によって京都にもたらされると、六波羅に居住する平氏方諸将の妻子等は、「悲泣極まりなき」状態に陥ったと、右大臣九条兼実^{くじょうかねね}の日記『玉葉』^{ぎょくよう}にみえている。

次いで翌5日になると、平氏軍敗亡の子細が明らかとなる。平氏4万余騎の軍勢のうち甲冑を帯びて京都に逃げ戻った武士は、僅か4、5騎許に過ぎず、その他過半は死傷し、残党は皆山林に遁れたものの、そのほとんどは討ち取られたとのことであった。

また平氏第一の勇士として知られた平盛俊・同景家^{もりとし かげ}（景高の父）・同忠経^{ただつね}等大将の3人は、鎧を脱ぎ捨て帷子を前に結び髻を落として、僕従一人も伴わず、命からがら京都に逃げ帰ったとみえている。さらに平氏軍を打ち破った敵方の義仲軍は、僅か5千騎にも及ばない兵数であったとされ、合戦の大敗については、平氏軍の大將等の間で互いに権勢を争い、作戦上の支障を生んだことが敗因と伝えられていた。

『平家物語』によれば、同年4月、北陸道に下った平氏の追討軍10万余騎の内、7万騎が義仲軍との合戦で討ち取られ、京都に逃げ帰ったのは、僅か3万騎であったとみえる。しかし『玉葉』などの当時の史料からは、平氏軍4万と義仲勢5千の軍勢が、加賀路で合戦を展開し、そこで平氏軍が決定的に大敗を喫したとある。その報が京都の人々に伝わり驚かせたのは、6月朔日の篠原合戦の敗北であったことが知られる。



源氏・平氏軍の進路

※3 主に武家社会で用いられた男性用衣服。武士の正装や甲冑の下に着る「鎧直垂」などがあり、室町期には貴族社会でも着用された。
 ※4 甲冑の製造様式で、小札（こざね）板を革や糸で上下に結び合わせることで動きやすくしたものの。